

鈴木祐丞『キェルケゴールの信仰と哲学 —生と思想の全体像を問う—』書評

藤枝真

本書が指定する諸テーゼがわれわれにもたらすのは、…自分自身にとっての救いの可能性すなわち信仰のあり方について思索を重ねて、それを実際に体現しようと腐心し、そうした彼にとっての本来的な生の営みの中で、人々のために、同時に自分自身のために、著作家として様々な著作を世に送り出していった、そうしたキェルケゴールの実存的思想家としての姿なのである（17頁）。

本書は、筆者が筑波大学に提出して博士号（文学）を授与された学位論文「キェルケゴールの実存的思想——1848年の宗教的体験と『死にいたる病』の分析を通じた考察」を元にして著されたものである。本書の全体像をつかむために、章構成を以下に掲げておく。

- 序 章 キェルケゴールの生と思想
- 第1章 キェルケゴールにとって1848年とは——主題とテーゼ
- 第2章 方法論的考察
- 第3章 信仰の模索——宗教的体験までの生と思想
- 第4章 信仰の哲理——宗教的体験の契機としての『死にいたる病』
- 第5章 信仰の確信——1848年の宗教的体験
- 第6章 信仰を生きる——1848年以降の生と思想
- 終 章 実存的思想家としてのキェルケゴール

タイトルにも表れているように、この研究はキェルケゴールの生と思想を、その著作や日誌記述の読解をもとにして、特に1848年の宗教的体験を中心にし

て明らかにすることを企図している。そして主たる注目点であるその宗教的体験を、筆者が引用する橋本淳の記述を借りて説明するならば、次のようになる。「1848年という年は、アウグスティヌスの回心やダマスコ途上でのパウロの回心に類比させることには困難が見られるものの、キェルケゴールの個人的な宗教生活において、しかしながら、何らか大きな転機を画したことは、研究者間で一般に認められる」(10頁)。また、この体験について大谷愛人は次のように述べる。「1848年4月19日、キェルケゴールの日誌によるならば、『私の本質の変化』と称せられる出来事が起る。そしてそれ以降の著作活動は全く新しい段階に入り、全く新しい展開を見せる」(11頁)。本書が論じる主たる問題は、筆者が先行研究を引用しながら示しているこの点に集約されているといえる。すなわち、橋本や大谷、そしてW.ラウリーらが注目した1848年の著述上の転回点の意義を論じていることであるが、注目すべきは、それを彼らとは別の仕方と読解することなのである。

そもそも、キェルケゴールの1848年の宗教的体験とは一体何なのであろうか。筆者は日誌記述を時系列に沿ってたどることによってそれを描き出している。

1848年4月19日の日誌には次のように記されている。「私の存在全体は変化した。私の隠蔽性と閉じこもりは破られた——私は語らねばならない」(153頁)。

しかし、4月24日においては、それに対する揺り戻しとも読み取れるような感情を吐露している。「否、否、私の閉じこもりはやはり取り除かれはしない。…むろん私は罪の赦しを信じている。しかし、私は、それを、これまでのように、次のように理解している、すなわち、より深い意味での他の人々との関わり合いから遠く離れてこの閉じこもりの悲痛な牢獄に居続けるという私の罰の生を送らねばならない」(164-5頁)。閉じこもりの生からの脱却、そして牧師の仕事を得て活動する生への希求、そしてそれが現実的にはかなわないことに直面し、罪の赦しを願いつつも別のかたちでの事態の打開をキェルケゴールは模索しているのである。

筆者はつづいて5月11日に記された日誌にその打開の可能性が記されている

と考えている。キェルケゴールは、ほとんどの人が直接性のなかでのみ生き、いくらか反省へと進むことがあるが、多くはそのまま生を終えると述べ、さらに次のように記す。「例外者たちは…反省によって始め…、より成熟した年齢に、信仰の可能性が彼らに示されるのである。というのは、信仰とは反省のあとの直接性だからである」(171頁)。これらの日誌記述を元にして、筆者が言及するキェルケゴール研究が共通して示している見解は、1848年の宗教的体験という契機を、「反省のあとの直接性」へのスタートとしてとらえているのである。

しかしながら、筆者はキェルケゴールの遺した *Løse Papirer* のなかに、同年5月中旬に記したと推測される、その実現不可能性についての記述を発見している。それは次のようなものである。

ある人が、神が文字通り罪を忘れたということを心底から信じるだけの巨大な信仰の勇気を持ったと想定してみる。…するとどうなるのか？ いまやこうして全てのことが忘れられ、彼は新しい人間であるかのようだ。しかし、罪が何らの痕跡も残さないということが可能であるならば、それは、人間が、いまや、若さが有する、心労からの自由と共に生きるようになる、ということであろう。不可能だ！(180-1頁)

前述のとおり、この「覚醒」ともいえる体験を、橋本はある種の回心体験として位置づけている。また、大谷は、「第二の直接性」(反省のあとの直接性)に至ったキェルケゴールが三つの段階を経て決定的な変化をしたと論じている。それは、キェルケゴールの「内閉性」が打ち破られ、「贖罪の信仰」に達し、同時に「第二の直接性」(キリストが単独者の生の中心に立っていること)を得たということである。さらに大谷はその変化が著作活動に与えた影響を三つにまとめている。すなわち、著作活動をはっきりと人々に示そうとする姿勢、仮名著述の終了、キリストを模範として語るということである。またW.ラウリーはこの変化を“*metamorphosis*”と呼び、キェルケゴールの著述スタイルが間接伝達から直接伝達へと移行する契機としてとらえている。多少の異同

はありながらも、三者は共通してこの1848年のキェルケゴールの体験をある種の信仰上のプレイクスルーとして捉えているといえる。

それでは、どのような根拠に基づいて、筆者は「定説との対比という観点においては、定説と真っ向から対立する」（200頁）というようなテーゼを措定しているのだろうか。この定説に対して、筆者は本書第3章および第4章における「反省のあとの直接性」にかんする分析によって、これが、イサク奉献のあとでそれをふたたび受け取り直したアブラハムの信仰の境地と同義的であると考えている。その上で1848年の一連の日誌記述、なかでも5月中旬の記述に注目する筆者は、「反省のあとの直接性」が、単なる信仰の受け取り直しではなく、キェルケゴール自身にとっての「信仰の不可能性の認識」（201頁）であるととらえる。筆者は、内面性（閉じこもり）の状態を、「善に対する不安」（悪魔的なもの）という土壌を発生条件とする人間に潜む悪の倫理的な表現であり、自らの最深の内面性を他者に対して隠匿するという性向である」（201頁）と解釈している。その後の日誌記述から導き出されるのは、この閉じこもりの本質的な解決のためには、「その根源に存するところの人間の罪が解決されねばならない」（202頁）というキェルケゴールの認識である。つまり筆者の解釈では、1848年の宗教的体験とは、閉じこもりが解消されて「反省のあとの直接性」に逢着したのではなく、その信仰の境地が自分にとっては起こりえないものであること認識し、そのうえで自分自身にとっての罪の許しの信仰の可能性を追求することを意味していたのである。

このようにして、キェルケゴール読解の際の定説とは異なる見解を導き出している筆者であるが、この宗教的体験を否定的に論じているのではないことは、次の記述にも明確に現れている。

キェルケゴールは、…普通の間人は神の意志を直接的な確実性を以て認識することができないこと、それゆえ普通の間人にとっては自らを犠牲に捧げキリストとの同時性を生きるといった理想的な信仰のあり方を体現することが困難であることを認識し、そして、普通の間人にとって、信仰とは、結局のところ、その不確実性にもかかわらず絶えず神意を尋ね求めよ

うとする営みとして表現される以外にはないのだということを、その意味で信仰とは「自己への無限の関心」であることを、確信したのである。(213頁)

この確信によって、キェルケゴールはこれまでの生が神の摂理によるものであったことを知り、その生が実際のところは信仰を表現していたのだと気づくのである。それからの著作活動、とりわけ『キリスト教の修練』において、「キリストとの同時性という「最高度の理想性」にまで高められた「キリスト者であるための要求」を前面に押し出して叙述することにより、読者にそうした理想と比しての自らの低さ・罪深さを認識させ、以て、各人を神の恵みである罪の赦しについての信仰へと導こうとした」(218頁)のが、キェルケゴールの宗教的体験のもたらした意義であった、と筆者は理解している。

この宗教的体験の筆者の理解と呼応するもうひとつの点が、キェルケゴールが自らの課題を「ソクラテス的な課題」と認識していた点である。デルポイの神託から導き出されたソクラテスの「無知の知」の自覚と類比的に理解することができるこのキェルケゴールの宗教的体験は、「信仰の獲得」ではなく、自分自身も含めて「理想的信仰に比しての自らの至らなさを誠実に認容すること」(220頁)と理解されるべきであることがここからも明瞭に導き出されるのである。

書評の最後に、本書の中に既に新たな研究の可能性が垣間見えていることについて言及して筆を置くことにしたい。筆者は今回のキェルケゴール研究の方法論として、生と思想の密接な関連に注目しており、それは橋本淳の研究に大きな影響を受けているが、もう一つの影響として、鬼界彰夫のワイトゲンシュタイン研究を挙げている。特に、ワイトゲンシュタインの前期思想(主に『論理哲学論考』)から後期思想(主に『哲学探求』)への過渡期に記されたとされる『哲学宗教日記』*1は、ワイトゲンシュタインの倫理・宗教的側面を伝えてくれるものであり、そこに表された「自己の低さの認識」に筆者は今回のキェ

*1 ウイトゲンシュタイン『ワイトゲンシュタイン 哲学宗教日記』イルゼ・ゾマフィラ編、鬼界彰夫訳、講談社、2005年

ルケゴール研究との結節点を見出している。

これは今回の研究への方法論的な礎石となっているが、キェルケゴールとウイトゲンシュタインの比較研究は残念ながら本書での主たる論点ではないので、筆者は注意深くそのことを語らずにとどめている。しかしその一方で、この方面の研究が筆者にとっての新たな課題であることは間違いないだろう。既に筆者は“Wittgenstein’s Relations to Kierkegaard Reconsidered: Wittgenstein’s Diaries 1930-1932, 1936-1937”^{*2} や、「ウイトゲンシュタインのキェルケゴール体験」^{*3} などで研究を進めており、さらなる研究の結実が待たれるところである。

^{*2} *Kierkegaard Studies Yearbook 2011*, De Gruyter, 2011

^{*3} 日本宗教学会編『宗教研究』381号、2014年